



臨床解剖研究会ニュース



第16号

2013年11月10日発行

会長退任にあたって

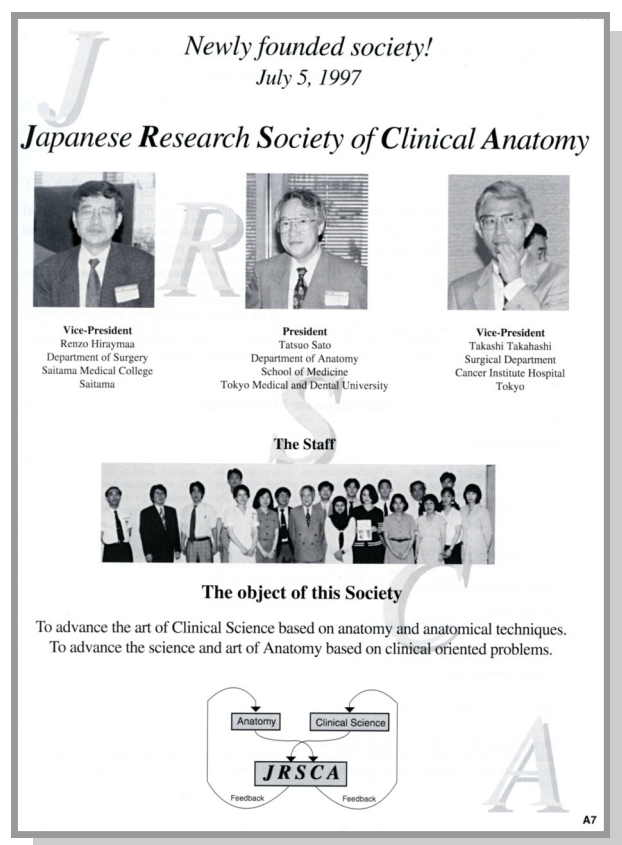
佐藤 達夫（東京有明医療大学）

去る2013年8月23、24日に鹿児島市で開催された第17回臨床解剖研究会をもって、設立以来16年間務めさせていただきました会長を退任いたしました。本研究会が今日のように発展することができたのは、ひとえに本研究会に熱心にご参加いただき、ご指導いただいた幹事、世話人の先生方はもとより、会員の皆様のお蔭であると心から感謝し御礼を申し上げます。

設立当時を振り返ってみますと、1990年ごろから癌研外科の高橋孝先生（故人）、東京医科歯科大外科の平山廉三先生らが外科の先生方に呼び掛けて、時々、クローズドの臨床解剖懇話会を開いておりました。折しも、かのヴェサリウスの人体構造論（ファブリカ）発行から450年に当たる1993年の暮に、その前年、医科歯科大の図書館に貴重図書として購入することができた「ファブリカ」を閲覧し、“近代解剖学450周年を祝う会”をお二人の先生方と外科教室の先生方、第2解剖（当時）の教室員たちとで行いました。その折、手術を行うさいに必要な臨床解剖を学びディスカッションできる場がないので、広く外科医に呼びかけて研究会を是非起ち上げようと話が決まりました。解剖学が細胞学、分子生物学へとより微細構造へと目覚ましい発展を遂げて、マクロ解剖など時代遅れで研究し尽くされたものと思われていた世の中で、毎日手術に当たる外科医の疑問が解決できるような局所解剖学を議論する研究会の必要性を感じ、少しずつ準備を進めていった次第です。そして外科の先生方を中心に、産婦人科、泌尿器科、放射線科、解剖学など、研究会の趣旨に賛同くださった先生方が集まり、3年半後の

1997年7月5日に第1回臨床解剖研究会が産声をあげたのです。

当日は梅雨明け直後の暑さの中、会場は東京医科歯科大の講堂でしたが、冷房が良く効かず汗を拭き拭き、教室員、大学院生、解剖実習を終えた学生まで動員してまさに手作りの研究会でした。終了後は参加者全員で臨床解剖研究会の発足と発展を祝い缶ビールでささやかな乾杯をしたことが思い出されます。第1回から第17回までそれぞれに忘れがたい思い出がありますが、一つ一つあげていけば紙数がいくらあっても足りない



第1回臨床解剖研究会の記事がSRA (Surgical and Radiologic Anatomy) 誌(1997)に掲載された。

ことになり、残念ながら割愛させていただきます。

本研究会は、従来と全く遊離しがちな臨床サイドと解剖サイドとが情報を密に交換し、互いに切磋琢磨しあって、診療の質を高めるように協力することを目的としますが、専門分野に限局した縦割りの学会ではないので、専門医・認定医等の資格取得とは関係がなく会員数もあまり増えません。しかし横断的かつ少人数のいささかマニアックな学会であり、頭のテッペンから足のさきまで専門部位・器官以外の発表をじっくりと聴いた上で十分に質疑を交わし理解を深めることができます。専門以外の部位の研究からいろいろなサジェスションを得ることができ、出席したことを後悔しない研究会だという評価はよく耳にするところであります。そのような雰囲気は横断的かつ研究会でなければ維持できないのかもしれないかもしれません。

臨床解剖研究会を起ち上げ、今日の形を作って何とか今日まで来たことで私の責任の半分を果たすことはできたかと思えます。継続は力なりというところでしょうか。しかし一方で継続は停滞を意味しがちです。臨床解剖もある意味では大きな曲がり角に来ている、いや通りすぎてしまったかもしれません。鏡視下手術や画像診断の驚くべき発達により従来見えなかったものが明瞭に観察できるようになり、解剖の繊細化が要請されております。新鮮解剖体の活用によりとりわけ臓側筋膜の研究も詳細化し、またコメディカルの解剖教育も進化させる必要にせまられています。このような新時代の臨床解剖という新しい酒は新しい革袋に納めなければなりません。そこで2、3年前から会長はじめ役員の交代を本研究会の将来にとって実りあるものとするために、将来構想検討委員会（委員長、竜崇

正先生）に検討していただき、その結果に基づき世話人会の議を経て、現在最もアクティブな解剖学者の東京医科歯科大学臨床解剖学分野 秋田恵一教授に新会長にご就任いただいた次第であります。

欧米では臨床解剖は歴史を持ち、米国臨床解剖学会（American Association of Clinical Anatomists, AACA）も欧州臨床解剖学会（European Association of Clinical Anatomy, EACA）も参加人数が多く、テーマの守備範囲も狭くありません。しかしやや教育法に偏りがちで、また科学的解剖学としての研究発表の質もわが臨床解剖研究会のように高くないことをしばしば感じて不満を覚えていました（このことは欧米の若手解剖学者も感じているようです）。わが国のサイエンティフィックな臨床解剖研究会を世界に発展させることこそ、これからの課題の一つと言えるでしょう。昨年日中韓で第1回のアジア臨床解剖学会が開かれ、アジアでの臨床解剖学会（Asian Association of Clinical Anatomy, AsACA）が旗揚げされました。第2回は来年、第18回臨床解剖研究会とジョイントミーティングの形で新会長秋田恵一当番世話人のもとに東京医科歯科大で行われることになっています。今後は本研究会（Japanese Research Society of Clinical Anatomy, JRSCA）が日本臨床解剖学会（Japanese Association of Clinical Anatomy, JACA）に発展し、さらにAsACAのファーストランナーとしてAACA, EACAと並んで、否むしろ世界の臨床解剖をリードして行ってほしいと願っています。

最後に、設立当初から事務局業務を担当してくださった坪井陽子氏に感謝と御礼を申し上げます。



会長就任にあたって

秋 田 恵 一

(東京医科歯科大学大学院臨床解剖学分野)



平成25年8月22日に行われました、第17回臨床解剖研究会の世話人会にて、本会の次期会長にご指名いただき、8月25日より佐藤達夫先生より引継ぎました東京医科歯科大学大学院臨床解剖学分野 秋田恵一でございます。本研究会は、多くの臨床科を解剖学という共通言語の元に結び付けるという役割を持つ会であります。そのため、肉眼解剖学ならびに臨床解剖学を専門とする本邦では数少ない教室の一つを主宰するということで、臨床科と解剖学の研究室との橋渡し役として仰せつかったものと理解しております。2年間の任期ではありますが、責任の重さを痛感しております。第1回より本会を育て、守ってこられた佐藤達夫先生ならびに多く世話人の先生方の築きあげてきたものをさらに発展させていくべく努力してまいりたいと存じます。また、本研究会の中心的な役割であります事務局を東京医科大学人体構造学講座の伊藤正裕教授にお願いすることとなりました。佐藤達夫先生、伊藤正裕先生、ならびに多くの世話人の先生方に支えていただきながら、本会のために微力ではありますが貢献していきたいと考えております。よろしくお願い申し上げます。

本邦における臨床解剖学は、佐藤達夫先生がその基盤を作られました。外科系ならびに放射線科の医師とともに、解剖学の臨床的応用ならびに臨床における問題点を解剖学的に解析することを主眼として発展してきました。解剖学と臨床医学のコラボレーションの中で、応用科学としてのみならず、それらを基にして形態を見直すという基礎科学としての要素も含んだものでありました。このような研究を基に、新しい術式や診断技術の開発が行われたり、また新たな解剖学的な構造の発見やその解釈が行われることになりました。両輪が揃ってうまく回ることによって医学の進歩に貢献してきたと言えるかと思います。

一方、国外に目を向けますと、同じ臨床解剖学でありましても様々なヴァリエーションがあります。アメリカやイギリスのような医学教育としての解剖学教育技術を中心として発展しているもの、ヨーロッパのような外科医等の臨床家が主体であり解剖学との間に多少の溝のあるものが見られます。アジアの各国ではまだ方向性の模索が続いているといった段階でありましょうか。これらを見るならば、本邦での臨床解剖の発展は理想的な構図に思えます。しかし、医学教育におけるテクノロジーの進歩やそれらを支える解剖学的基盤の充実ぶりを見ると、我が国にはまだまだ欠けていると言わざるをえない情報発信のためのインフラ整備の必要性を感じます。また、ヨーロッパにおける臨床と解剖学との垣根の低さを感じ、さらに多くの交流が必要なが考えられます。アジア諸国さらには南米、アフリカなど多くの国からの臨床解剖学の情報は、様々な形で私たちの研究のヒントが得られるものと思っております。臨床解剖研究の発展のために、多くの国際交流を通じて、本研究会に新たな情報をもたらすことができればと思います。

組織学を一部含めた肉眼解剖学的な研究は、巨費を投じる必要はなく、発想と観察力があれば、ほとんどのことを行うことができます。その意味では、どこにいてもアドバンスがあるとは言い難いような状況です。その中で、より良い、質の高い研究を行うためには、臨床からの刺激的なアイデアを必要とします。この研究会を通じて多くのコラボレーションが生まれることが理想だと考えております。

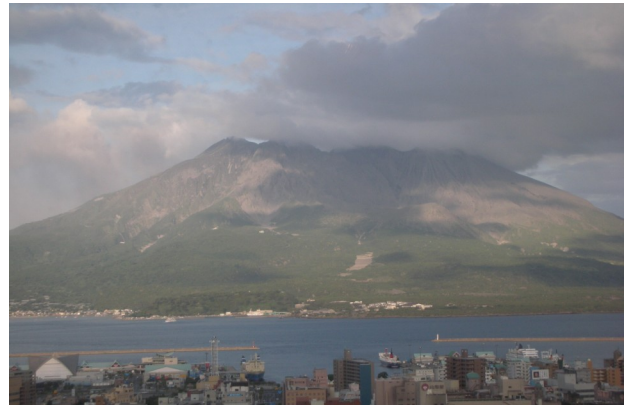
多くの先生方のご指導を賜りつつ、今後、さらに発展させていくことができるよう努力をしていく所存です。よろしくお願い申し上げます。

●第17回臨床解剖研究会の報告

第17回臨床解剖研究会は、平成25年8月23日（金）、24日（土）の2日間のわたり、島田和幸教授（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科人体構造解剖学）と夏越祥次教授（同消化器・乳腺甲状腺外科学）の2人の当番世話人により、鹿児島市の城山観光ホテルにて開催された。夏越先生は第23回九州内視鏡下外科手術研究会の当番世話人でもあったため、今回初めて他の研究会と共同開催の形をとり、どちらの研究会にも出席可能という極めて盛り沢山の2日間となった。折しも桜島が研究会の数日前に大噴火し、開催に影響はないか案じられたが、鹿児島市民にとっては桜島の噴火は日常茶飯事とのこと、鹿児島入りして心配ないことが分かった次第であった。会場の城山観光ホテルは桜島を鑑賞するために建てられたような絶好のロケーションにあり、高台で市内も一望できる。懇親会場からは噴煙をあげる桜島が目の前に見え、遠方からの出席者は絶景に歓声をあげ、しばし見とれたり写真を撮ったり、思い出に残る会であった。

学術集会は、一般演題35題、特別講演は両研究会合わせて3題、ランチョンセミナー1題が行われた。「頸部郭清術の臨床解剖」（千葉大学臨床分子生物学 丹沢秀樹先生）、

「内視鏡手術からみた骨盤底解剖」（京都大学消化器外科 坂井義治先生）、「鏡視下手術からみた解剖—特にリンパ節郭清を中心として—」（東京有明医療大学、会長 佐藤達夫先生）、「鏡視下時代に適合する胃の外科解剖：筋膜からfasciaへ、膜から層へ」（虎の門病院消化器外科 篠原尚先生）が講演された。島田先生、夏越先生はじめ、事務局を担当くださった田松裕一先生、前村公成先生、教室の先生方、秘書の方々にこの場を借りて感謝と御礼を申しあげる。詳細は学会報告記（Page 6, 7）をご執筆いただいたのでご参照ください。



写真はホテル入口に置かれた案内看板(上)と噴煙を上げる桜島

●第17回世話人会の報告

●第17回世話人会は研究会前日の8月22日（木）に城山観光ホテル10階のスカイホールにて16名の世話人が出席して開催された。会員数は本年4月現在施設会員91、個人会員107、賛助会員2で、ほぼ前年と変わっていない。

●本年度は役員改選の年にあたる。将来構想検討委員会で検討していたが、設立時から16年間会長として本研究会を率いてこられた佐藤会長が退任し、新会長として秋田幹事が推薦され承認された。

幹事、監事は次のとおり承認された。幹事：寺本龍生・大谷修・竜崇正・光嶋勲・遠藤格幹事（継続）、伊藤正裕・太田哲生・加藤友康世話人（新任）。監事：衣袋健司監事（継続）、中野隆世話人（新任）。

嶋田・三輪幹事は会長より名誉会員に推薦され承認された。名誉会員の細則は早急に検討する。

●次期第18回（2014）当番世話人については秋田恵一幹事（東京医科歯科大学大学院臨床解剖学分野教授）が持ち回り幹事会で承認され、今世話人会で報告された。次々期第19回（2015）当番世話人は國土典宏世話人（東京大学大学院肝胆膵外科、人工臓器・移植外科学教授）が推薦され承認された。

第18回は2014年11月8、9日に第2回アジア臨床解剖学会とジョイント・ミーティングの形で開催予定。会場は東京医科歯科大学。詳細は追ってホームページ等でお知らせいたします（Page 10参照）。

●今後学術委員会を作って研究会のプログラム構成を協議・検討する。

●平成24年度会計報告ならびに平成25年度予算は次頁の通り承認された。

臨床解剖研究会平成25年度予算
(平成25年4月1日～平成26年3月31日)

○収入（単位:円）

科 目	予 算	備 考
I. 前年度繰越金	1,547,939	
II. 年会費(平成25年度分)	1,473,000	施設会員12,000円×91
		個人会員3,000円×107
		賛助会員30,000円×2
III. 臨床解剖研究会記録広告料	100,000	
収入合計	3,120,939	

○支出（単位:円）

科 目	予 算	備 考
I. 研究会補助金	300,000	第17回研究会
II. 事務費	330,000	
1. 通信費	150,000	記録送料含む
2. 印刷費	80,000	ニュース、封筒
3. 文具費	40,000	
4. 雑費	20,000	
5. その他	80,000	ホームページ維持費
III. 臨床解剖研究会記録	660,000	No.14製作費,英文校閲費, PDF用カラー図作成費
IV. 会議費,交通費	350,000	世話人会補助,幹事会等
V. 人件費	50,000	アルバイト5,000円×10日
VI. 予備費	100,000	
VII. 次年度繰越金	1,330,939	
支出合計	3,120,939	

臨床解剖研究会平成24年度収支決算書
(平成24年4月1日～平成25年3月31日)

○収入（単位:円）

科 目	予 算	決 算	備 考
I. 前年度繰越金	1,483,130	1,483,130	
II. 年会費	1,512,000	1,494,000	
1. 平成21年度分年会費		3,000	個1
2. 平成22年度分年会費		6,000	個2
3. 平成23年度分年会費		48,000	施2, 個8
4. 平成24年度分年会費	1,521,000	1,437,000	施93, 個87, 賛2
III. 臨床解剖研究会記録広告料	100,000	70,000	5社
IV. 雑収入	0	3,114	
1. 預金利息他		3,114	預金利息他
収入合計	3,095,130	3,050,244	

○支出（単位:円）

科 目	予 算	決 算	備 考
I. 研究会補助金	300,000	300,000	第17回研究会
II. 事務費	370,000	263,122	
1. 通信費		127,369	
2. 印刷費		31,395	
3. 文具費		10,513	ニュース、封等・便せん
4. 雑費		17,090	
5. その他		76,755	ホームページ維持費
III. 臨床解剖研究会記録	600,000	584,083	No.13
IV. 会議費,交通費	400,000	315,100	世話人会補助,幹事会費, WG費他
V. 人件費	50,000	40,000	アルバイト
VI. 予備費	100,000	0	
VII. 次年度繰越金	1,275,130	1,547,939	
支出合計	3,095,130	3,050,244	

第17回臨床解剖研究会を開催して

当番世話人 島 田 和 幸
(鹿児島大学大学院人体構造解剖学分野)

今年の夏はこれまでの夏に比べると暑い日が続く日々となり、また学会開催の数日前には鹿児島の象徴である桜島の大爆発による降灰が全国ニュースとして取り上げられ話題となりました。研究会開催日の8月23、24日の両日にかけては天候にも恵まれ、また降灰もなく、第23回九州内視鏡下外科手術研究会との同時開催による第17回臨床解剖研究会が開催されました。会場は西南戦争最後の激戦地となった城山山頂で、鹿児島市内や桜島が一望できる城山観光ホテルの二つの会場で行われました。都会で開催される研究会と違って鹿児島という地方都市での開催という懸念もありましたが、35題もの多くの演題が集まり、また多数の参加者となりました。今回の当番校である鹿児島大学には臨床解剖研究会の世話人が2名いることで、それぞれの専門分野から腹部内臓の臨床解剖と頭頸部臨床解剖の2題をあげて二つの大きなテーマを掲げました。頭頸部関係に関しましてはこれまでの研究会よりもより多い発表演題が集まりました。また腹部内臓に関しましては、内視鏡下外科手術研究会の会員

の方々も興味を持っていただける内容でもありました。為に、内視鏡下研究会の会員の皆様からの参加もあり大変好評を得た様でした。特別講演に関しましては臨床解剖研究会と内視鏡下外科手術研究会の両研究を代表する様な先生方による『内視鏡手術からみた骨盤底解剖』と『鏡視下手術から見た解剖—特にリンパ節郭清を中心として—』の2題のご講演と、『鏡視下時代に適合する胃の外科解剖』のテーマでのランチョンセミナーもしていただきました。今回の研究会は、私も主催者側といたしましても、両研究会で非常に良い議論とお互いの研究会の交流が行なわれ、理想的な臨床解剖研究会になったのではないかと考えております。

最後になりますが、本研究会幹事、世話人の先生方をはじめ、両研究会に参加していただいた多くの関連分野の先生方および当番世話人の医局員の皆様方の多大なご支援に関しまして深く感謝いたします。本当にありがとうございました。

第17回臨床解剖研究会を開催して

当番世話人 夏 越 祥 次
(鹿児島大学消化器・乳腺甲状腺外科学)

平成25年8月23、24日の2日間にわたり鹿児島市で、第17回臨床解剖研究会および第23回九州内視鏡下外科手術研究会を合同開催させていただきました。前者の鹿児島大学人体構造解剖学分野教授島田和幸先生と共に当番世話人を拝命しました。1年前に世話人を受諾した時から後者の研究会との合同開催を考えていました。外科医にとって解剖学は必須であり、日本一流の解剖学者のお話が九州地区で聞ける機会は稀であることから、早速、佐藤達夫臨床解剖研究会会長と前

原喜彦九州内視鏡外科手術研究会代表世話人に合同開催をご相談し、ご快諾を得ました。近年、内視鏡外科手術の普及により、開胸・開腹による直視下で見る肉眼解剖と異なった視点から、内視鏡手術の外科解剖が研究されてきています。このような観点からも、内視鏡手術に興味を持つ若手外科医が、両方の解剖学を勉強する良い機会になればと思っていました。先ず特別講演で、内視鏡外科の立場から日本を代表する外科医である京都大学消化管外科学の坂井義治教授、肉眼

解剖の立場から佐藤達夫臨床解剖研究会会長にお話しをしていただくことにしました。お二人の講演の組み合わせは全国学会でもなかなか聴講することができない素晴らしい組み合わせと自負していました。

さて、研究会当日に参加者からのあいさつ代わりの言葉は「桜島は大丈夫ですか?」「火山灰は降ってきませんか?」でした。8月18日に爆発的噴火が起こり、噴煙が5,000mまで上昇し、観測史上最も高い噴煙というニュースが流れていたためだと思われました。今年で爆発的噴火が500回くらい起こっていたので、地元のわれわれはほとんど日常生活と変わらない感じでいました。せっかく全国から鹿児島へ集まっていたので、桜島も噴火で歓迎して欲しいと思っていましたが、23、24日にかけては小規模爆発が7回あったようでした。

臨床解剖研究会には35演題、九州内視鏡外科手術研究会には77演題の応募を頂きました。1日目は臨床解剖研究会のセッションが主体でした。臨床医が日頃関わりの少ない専門臓器以外の他臓器の血管、神経の微細解剖は今後の臨床研究の糧になりました。発表を聴きながら他科、基礎から学ぶ大切さを再認識しました。各演題で活発な討議が行われ、解剖学の奥深さが伝わってきました。

2日目は九州内視鏡下外科手術研究会も開催され、若い外科医が多く参集し、活気に満ちあふれていました。各セッションで時間を超過する白熱した討論が行われ、参加された先生方の基礎、臨床的側面からみた解剖学に関する熱い思いが伝わってきました。若い先生方が内視鏡手術の技術面のみに留まらず、外科の根幹をなす解剖学の重要性を再認識してくれたのではないかと思います。



当番世話人を囲んで人体構造解剖学分野ならびに消化器・乳腺甲状腺外科学の教室員達と

ランチョンセミナーで講演された虎の門病院の篠原尚先生の「鏡視下時代に適合する胃の外科解剖」では新しいouter dissectible layerとinner dissectible layerの概念を提唱され、若い外科医も大いに刺激を受け勉強になったと思われました。次いで行われた特別講演では、坂井教授の内視鏡下手術からみた骨盤底解剖と、佐藤会長の鏡視下手術からみた胃癌のリンパ節郭清の解剖は聴講者全員が感動したと思われました。「内視鏡外科手術と臨床解剖の融合と発展」という今回の研究会の大きな目的に合致した素晴らしい内容でありました。午後からの演題も各会場で活発な討論が行われ、研究会本来の良さが堪能できました。

今回は臨床解剖研究会および九州内視鏡下外科手術研究会合同という変則的な開催となりましたが、解剖という観点からは多くの共有する項目があり、参加者の先生方から称赞の声をいただきました。臨床解剖をKey wordに参加者、特に若い先生方が明日からの手術や研究の分野で、本研究会の知識を還元していただければ望外の喜びです。両研究会の世話人、幹事、参加者の皆様のご協力により、両研究会が盛会裡に終了できましたことに感謝申しあげます。最後になりましたが、今年度の本会をもって臨床解剖研究会会長をご退任されます佐藤達夫先生には、これまでのご尽力に深甚なる敬意を表します。

*

*

*

ヨーロッパ臨床解剖学会(EACA)に参加して

二 村 昭 元

(東京医科歯科大学大学院 臨床解剖学分野・整形外科)

はじめに東京医科歯科大学大学院臨床解剖学分野の二村と申します。整形外科の臨床医であります。訳あって解剖学教室に席を置き、肉眼解剖の研究に携わっております。去る2013年6月26～29日にポルトガルはリスボンにて行われましたヨーロッパ臨床解剖学会(European Joint Congress of Clinical Anatomy, EACA 2013)に初めて参加しましたので報告させていただきます。

当教室では2年に1度の行事であるかの如く、毎度、教室をあけて参加しています。秋田教授を筆頭に、山口先生、那須さんらスタッフ、三井記念病院放射線科の衣袋先生、非常勤講師の松永先生、大学院生の清川先生、岡田先生、中澤先生らと同行させていただきました(写真)。



会場であるリスボン大学医学部校舎(Egas Moniz Building)の前にて

リスボンはポルトガルの首都であり、人口300万人を超える同国最大の都市です。日本からは直通便はなく、ヨーロッパのハブ空港を介して約15～17時間を要します。そのアクセスの遠さからイタリア・フランス・UKと異なり、よほどの用でもない限りは来ることもないかというのも学会参加の動機でありました。海外旅行客にも比較的使いやすい、こぎれいな地下鉄が整備されており、ホテルまで特にトラブルなく到着することができました。ただ石畳の歩道は100Lほどのスーツケースを転がして歩くには少し不向きなようでした。会場であるリスボン大学医学部校舎をタクシーでめざしたのですが、海外学会ならではの、学会サイトで得られるアクセス情報は意外と簡素で、何人かはかなり離れた別の病院へと連れて行かれたとのことでした。会場自体は校舎の中であり飾り気のないものの、学会の運営業者から派遣された素敵な女性が緑色の特徴的なコスチュームに身をまとい受付、会場業務をされており、あまり見ないシステムでこれは癒やされるものだと感じました。

演題としては3日間あるうちの前半は神経、頭頸部、骨盤といった各部位別の演題、そして後半は解剖手技や教育に関

する演題が企画されていまして。解剖学者というよりはまだまだ整形外科医としてのなじみが深いため、当然上肢や下肢のセッションに吸い寄せられるように聴講していました。整形外科領域に関していえば、解剖手技やイメージングの目新しさが強調された演題が多く、臨床のベースやニーズを理解して研究をデザインしている演題はあまりなかったように感じ、少し残念ではありましたが。私自身はまだまだ病態はおろか詳細な解剖学的知見すら明らかになっていない上腕骨外側上顆炎(テニス肘)の理解に必要な伸筋群起始と関節包付着に関する発表をさせていただきました。EACAのOfficial JournalであるSurgical and Radiologic Anatomy (SRA)の編集長かつ私の留学先ホストであったルーアンのFabrice Duparc教授や、元編集長であったリールのChristian Fontaine教授は共に整形外科医(特に私と同じく上肢外科医)かつ解剖学者であり、やはり二人ともその会場にいらっしゃり、お互いの演題についてディスカッションすることができたのはとても良い経験となりました。

フランスの解剖学者はみな外科医や整形外科医が兼任であり、文字通り「臨床に必要な解剖」という観点から解剖研究を行っており、彼らのキャリアは今の自分にとって大変興味深いものでした。

リスボンの気候は湿気が少ないものの直射日光が厳しいことと、塩気の強い(鰯の塩漬けなど)食べ物が多いため、常に水分補給をしていないとすぐに脱水になりそうでした。しかし少し暑いことを我慢して歩いてみると、大航海時代にヨーロッパ・アフリカ・インドなどから獲得された栄華の名残を感じさせるジェロニモ修道院やベレンの塔など他の西欧都市とはまた違った歴史を感じることができました。その近くには「発見のモニュメント」なる記念碑がテージョ川にむかってたち、ヴァスコ・ダ・ガマ、マゼランやフランシスコ・ザビエルなど歴史的に著名で日本でも知られるポルトガル出身の偉人に会うことができました。

さて最後に2年後のことをいうと鬼が笑うかもしれませんが、次回の本学会は2015年に先述のFabrice Duparc教授会長の下に、フランスはルーアンにてとりおこなわれる予定です。短い時間ではありますが、フランス短期留学時に滞在していたのでご紹介申しあげると、ルーアンはパリから列車で1時間半ほどのセヌ川のほとりにある小さな街ですが、ノルマンディー地方の首府であります。ジャンヌダルク終焉の地として、そしてモネの描いたフランスー高い尖塔をもつノートルダム寺院が有名であり、鴨肉やシードル、カルバドスというリンゴ酒、そして海産物もおいしくいただけます。この文章はポルトガルの報告ではありますが、2年後にフランスの地で皆様にお目にかかれたいことを楽しみにして終わりたいと思います。

第30回米国臨床解剖学会総会に参加して

坂 本 裕次郎

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科
口腔保健衛生基礎学分野)

2013年の米国臨床解剖学会 (The American Association of Clinical Anatomists, AACA) の第30回年次総会は、コロラド州デンバーにおいて7月9～13日の日程で開催されました。学会はダウンタウンにあるホテルで行われましたが、9日に行われたプレイベントのひとつとして、今回のホスト役であるコロラド大学 (University of Colorado) の医学部などがある医療系キャンパスを訪ねて解剖学の研究室や実習室などを見学させていただきました。現在の医療系キャンパスは、1998年に米国陸軍病院が他に移転した跡地に新たにつくられたということで、ダウンタウンから離れた場所にあるため、路線バスに乗って片道1時間弱かかりました。2009年に旧キャンパスからの移転が終わったという広大な敷地には、大学病院や小児病院などのまだ新しい大きな建物が並び、広い駐車スペースがあって大勢の人が来院していました。解剖学の研究室は、キャンパスの中央に位置する1941年につくられたBuilding 500とよばれるシンボリックな建物の中にありました。そこでは広い低温室の中に設置された大型の凍結切断装置や標本作製室などを見せてもらいました。この建物には、1955年にアイゼンハワー大統領が心臓病で緊急入院した際に臨時の執務室にもなったという病室などがEisenhower Suitとして保存されていました。教育用の建物の最上階にある実習室では、解剖台の周りが少し手狭には感じましたが、解剖台ごとに換気装置と学生用のパソコンが設置され、窓から離れた部屋の廊下側にも天窗から明かりが入るようになっていました。また、豊富な教材がそろった骨格標本室やシミュレーションルームなどを見せてもらいました。

今回の総会への日本からの参加者は、私と東京有明医療大学の佐藤達夫先生、東京医科歯科大学の秋田恵一先生が発表されたほか、米国留学中の久留米大学の渡部功一先生が出席されました。デンバーは海拔1マイル (1609メートル) の高地にあるため、猛暑で高湿度の日本とは違って、凌ぎやすい気候の中で学会期間を過ごすことができました。学会初日の夜の歓迎レセプションは、メジャーリーグ球団であるロッキーズのホームスタジアムのすぐ前にある、ビール醸造所直営のお店で行われました。

学会では、肉眼解剖所見に基づいて考察した発表内容もありましたが、全体としては、解剖学の学生教育や卒業研修のために工夫されたデジタル教材や教育手法に関する発表や、解剖学を臨床の診断などに応用するために工夫した技法や、デジタルシステムなどに関する発表が中心になっていたよう



コロラド大学ビルディング500



会長の閉会スピーチ

に感じます。シンポジウムとしては、可視化人体画像データプロジェクト (Visible Human Project) に関連したドキュメンタリー映画 “The Blue End” をもとにして献体について考えるもの、解剖学教育や学習評価に関するもの、学術的用語と臨床的用語における解剖学の専門用語に関するものなどがテーマになっていました。学会最終日前夜のディナーパーティーは会場のホテル内で行われ、名誉会員や功労会員などへの表彰が行われていました。

今回の総会が行われたデンバーは、空港とダウンタウンが離れていましたが、日本でも成田空港と都心が離れていることを考えると気になりませんでしたし、便数が限られてはいるものの、成田とデンバー間に就航した直行便を利用できたので乗り換え時間を挟まなくて済んだことなどを考えると、往復の旅程は比較的楽だったと思います。

第18回臨床解剖研究会の開催について

当番世話人 秋 田 恵 一
(東京医科歯科大学臨床解剖学分野)

第18回臨床解剖研究会は、2014年（平成26年）11月8、9日の2日にわたって、東京都文京区の東京医科歯科大学にて行います。第2回アジア臨床解剖学会（Asian Association of Clinical Anatomy; AsACA）との共同開催とさせていただきます。プログラムの詳細は徐々に明らかにしてまいります。今のところ決まっているところをお知らせいたします。

ヨーロッパ臨床解剖学会（EACA）の学会誌であるSRA（Surgical and Radiologic Anatomy）のChief editorであるフランスのルーアン大学Fabrice Duparc教授、ならびに英米の臨床解剖学会で非常に大きな活躍をされているイギリスWarwick大学のPeter Abraham名誉教授に特別講演を依頼しております。

また、これまで外科、泌尿器科、婦人科、放射線科などが中心となって本会が発展してまいりましたが、今回はこれに整形外科の分野の先生に入っていただくように企画を考えております。

アジア臨床解剖学会との共同開催ということでもありますので、英語で発表というセッションも多くなるかと思えます。また、ポスター発表も企画する予定です。演題募集は、2014年5月12日～6月30日を考えております。皆様の積極的なご参加をお願い申し上げます。

●臨床解剖研究会世話人

愛甲 孝	青雲会病院	坂井 建雄	順天堂大学医学部解剖学・生体構造科学
相磯 貞和	慶応義塾大学医学部解剖学	佐藤 健次	東京医科歯科大学名誉教授
秋田 恵一（会長） （当番世話人）	東京医科歯科大学大学院臨床解剖学	佐藤 達夫	東京有明医療大学
伊藤 正裕（幹事）	東京医科大学人体構造学	島田 和幸	鹿児島大学大学院人体構造解剖学
衣袋 健司（監事）	三井記念病院放射線科	白水 和雄	久留米大学医学部外科（大腸）
今井 裕	東海大学医学部専門診療学系画像診断学	杉原 健一	東京医科歯科大学大学院腫瘍外科学
岩井 武尚	守谷慶友病院つくば血管センター	砂川 正勝	宇都宮記念病院名誉理事長
遠藤 格（幹事）	横浜市立大学大学院消化器・腫瘍外科学	谷川 允彦	篤静会谷川記念病院
太田 哲生（幹事）	金沢大学消化器・乳腺・移植再生外科学	寺本 龍生（幹事）	明敬会重城病院外科
大谷 修（幹事）	富山大学名誉教授、東京医科大学客員教授	永島 雅文	埼玉医科大学解剖学
大友 邦	東京大学大学院放射線医学	中野 隆（監事）	愛知医科大学医学部解剖学
尾崎 紀之	金沢大学医薬保健研究域医学系機能解剖学分野	夏越 祥次	鹿児島大学大学院消化器・乳腺甲状腺外科学
加藤 友康（幹事）	国立がん研究センター中央病院婦人腫瘍科	平山 廉三	前埼玉医科大学教授
亀岡 信悟	東京女子医科大学外科学第2	福永 正氣	順天堂大学浦安病院外科
川端 一嘉	がん研究会有明病院頭頸科	前島 静顕	顕正会蓮田病院
北川 雄光	慶應義塾大学医学部外科学	前田 耕太郎	藤田保健衛生大学医学部消化器外科
北島 政樹	国際医療福祉大学	幕内 雅敏	日本赤十字社医療センター
北村 清一郎	徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部口腔顎顔面形態学	松井 修	金沢大学大学院先進画像医学研究教育講座
木原 和徳	東京医科歯科大学大学院腎泌尿器外科学	村上 弦	岩見沢江仁会病院
熊木 克治	新潟リハビリテーション大学	森 宣	大分大学医学部臨床医学系放射線医学講座
光嶋 勲（幹事）	東京大学医学部形成外科学教室	森谷 宜皓	日本赤十字社医療センター大腸肛門病外科
國土 典宏	東京大学大学院肝胆膵外科、人工臓器・移植外科学	山口 晋	化学療法研究所附属病院
小平 進	練馬総合病院外科	竜 崇正（幹事）	千葉県がんセンター
児玉 公道	九州中央リハビリテーション学院	渡辺 洸	渡辺記念長命研究所
後藤 昇	郡山健康科学専門学校	渡邊 昌彦	北里大学医学部外科

臨床解剖研究会事務局

〒113-8519 東京都文京区湯島1-5-45
TEL 03-5803-5145 FAX 03-5803-0116

東京医科歯科大学臨床解剖学内
<http://www.jrsca.jp>